



ポポフ ニュース

No 1

募金報告 (1996年3月まで)

収入		支出	
パンフ・絵はがき売上		パンフ・絵はがき製作費	177,244
京都	43,920	天王寺展送料他	2,512
鹿児島	43,304	郵送料	9,790
大阪	13,500	雑費 (コピー、封筒代他)	2,344
霊長類学会	9,300	ニュースレター製作費・送料	11,394
その他	11,000	ポポフへ送金	130,600
郵便振替	81,800		
講演入場料	55,000		
寄付金	76,060		
計	333,884	計	333,884

ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Polepole Foundation) の略称で、1992年にザイル共和国で設立されたNGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずにゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、ザイル東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくったり、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園や東ローランドを紹介するパンフレットや絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付金を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。日本ではまだポポフの会員を募集するまでには至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュース・レターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフグッズや絵はがきの販売についても紹介いたしますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。

-GORILLA-



活動報告

日本での活動

1994年12月27-29日

「第3のゴリラとポレポレ基金」展 堺町画廊 (京都)

東ローランドゴリラの写真展示とザイルのアート

講演: 「ゴリラと人の物語」

山極寿一 (京都大学霊長類研究所・助手)

「ザイルの人々と自然保護」

ムワンザ・ンドウダ (ザイル森林生態学研究所)

1995年1月4日

上屋久町宮之浦公民館 (鹿児島)

講演: 「ヒトはどうしてサルになれないか」

山極寿一 (京都大学霊長類研究所・助手)

「ザイルの昔話」

ムワンザ・ンドウダ (ザイル森林生態学研究所)

1995年4月30日-5月5日

「第3のゴリラとポレポレ基金」展 天王寺動物園 (大阪)

1995年6月16-18日 日本霊長類学会 犬山大会 (愛知)

パンフレット・絵はがき販売

イトーカヨー・コーポレーションが、販売するゴリラのぬいぐるみが一つ売れる毎に1米ドルをポポフに寄付してくれることになりました。ポポフとしてはこの販売にポポフのマークを使用することを了承しています。

ザイルでの活動

ポポフグッズの製作: 民芸品として、ザイルにしか生息していない東ローランドゴリラのペンダント、布製ワッペン、木彫りのゴリラの彫刻や仮面を製作して、カフジ・ビエガ国立公園へ訪れる観光客へ販売しています。しかし、隣国ルワンダやブルンジの内戦で、東アフリカを経由して当地へ到達することが困難になっているため、観光客めったに当地を訪れず、ポポフ・グッズもほとんど販売できていません。

土地問題の調停: カフジ・ビエガ国立公園の周辺には、以前公園内に居住していた人々が土地を借りて住み着いています。しかし、これらの人々の多くは失業者で現金収入がなく、土地の利用をめぐる所有者ともめ事を起こしています。ポポフはこういったトラブルを調停し、公園境界や自然観察路の建設、学術調査の補助員として人々を積極的に雇い上げ、できれば土地を購入させて農地をもたせるように奨励しています。これまでに4件のトラブルを調停し、19人を工事や調査の補助員として採用しています。今年は、国際的なNGOのWCS (Wildlife Conservation Society) が現地でゴリラの生息数調査を行うことになっているので、雇い上げられる人の数は増すでしょう。現在、農地の購入費用として350米ドルを貸し付けています。

難民の援助活動: カフジ・ビエガ国立公園の近くには、隣国ルワンダからやってきた難民のキャンプが無数にあります。ザイルの地元の人々は土地をこれらの人々に突然乗っ取られた形になっており、水、樹木、石など自然資源の利用をめぐるトラブルが続きません。とくに、水の使用は衛生に関わる重大問題だし、料理や吸をとるための薪の採集、建材確保のための伐採は森林に壊滅的な打撃を与える深刻な問題となっています。最近では、国立公園内へ無断で入って樹木を伐採したり、動物の糞を仕掛けたりする人々が後を断ちません。そこで、ポポフは村人と難民が代表者をたてて話し合う機会をつくり、水の使用に規則を設け、薪や建材を村人から購入して難民へ販売しています。これらの活動は国連の指導のもとに行われており、購入、販売と難民への配布は国連の係官の手を通して実施されています。

問題点: 600 km²という広大な国立公園の周辺の村を訪ねて回るのは、多くの労力と時間がかかります。この地域には電話が引かれておらず、無線もないので遠くの村と簡単に連絡を取ることができません。ポポフにはモーターバイクすらないので、人や物資を運ぶのにも苦労しています。また、文盲の人が多いのでさまざまな調停を文書でなく、口頭で伝え、合意を得なければなりません。学校教育の立ち遅れを早急に改善する必要があります。難民問題、雇用の不足、食料、衣料、薬など必需品の不足、学校や医療設備の不足など問題は山積しており、海外からの援助・協力が切望されています。

ポレポレ基金を訪ねて

阿部知暁（画家）

1995年の夏、あるテレビ局の番組取材をかね、私はザイルのカフジ・ビエガ国立公園に行くことができました。

ポレポレ基金のことを知って、ぜひ会ってみたいと旅行の計画を立て、前の年の夏に行くよう日程も決まっていた。しかし、ザイルの政治不安に加え、隣国ルワンダの内戦、大量の難民発生という事態になってしまったため、断念せざるを得ませんでした。

そして今回、やっと会えたポレポレ基金の人たちは、皆さん本当にまじめで、こつこつと活動している人ばかりでした。ペンダント・ヘッドや木彫りなどさまざまなものを作っており、その作品をたくさん見せていただきました。

森やゴリラを保護するとともに、そこに暮らす人々の生活を守っていこうという彼らの活動、これからめざそうとしていることなどを語り合いました。その中で、日本の私たちへの期待、単に資金面だけでなく、人と人とのつながりを大切にしたいという気持ちを、ひしひしと感じました。

2週間余りの滞在で、あまり大きな手助けはできなかったと思いますが、ポレポレ基金の人たちと顔を突き合わせ、語り合い、彼らの真剣な気持ちにふれることができたのは、とても貴重な体験でした。

日本にいても、ザイルのポレポレ基金の人たちと、ゆっくり、ゆっくり、森とゴリラの未来を考えていこうではありませんか。



阿部知暁画

阿部さん、日本の皆さんへ

ジョン・カヘークワ（POPOF事務局長）

ポポフのすべてのメンバーを代表して、「阿部さん、今あなたを目の前にしているなんて夢のようです」と言わせていただきます。

1992年の12月以来、私たちはポポフについて語らい、そしてお互いに知り合ってきました。でも、こうして顔と顔を突き合わせるのは今日がはじめてです。ようこそいらっしゃいました。どうか自分の家にいるつもりでくつろいでください。

ポポフは、ザイル国カフジ・ビエガ国立公園のまわりに住む人々によって作られたNGOです。ポポフの目的は、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラとその生息地を保護することにあります。

カフジ・ビエガ国立公園の動植物相は、バシ、バトゥワ、バテンボ、バレガ、バニヤンガという人々によって今大きな脅威にさらされています。ポポフの仕事はこれらの人々と腰をすえて話し合い、自然破壊を抑えることにあります。

バシ人：公園内へ無断で入り、村で小屋を建てる材料として竹、樹木、つるなどを伐採したり、女性はたきぎを取りにいきます。資金のある人々は、公園内の土地を買い取って牧場として利用したがつています。

トゥワ人：ほとんどの人々は、保護区ができた1937年、国立公園が発足した1970年以前に、公園内の森に住んでいました。果実を食べ、蜂蜜を集め、野生動物を狩って暮らしていたのです。森からの立ち退きを余儀なくされてから、彼らは公園の外側の小さな土地に住み着くようになりました。これらの人々は今でも公園内に無断で罾をかけ、アンテロープやイノシシをとっています。こうした罾にゴリラの子供たちがかかり、傷ついて手や足を失ったり、それがもとで死んだりすることがあります。

バテンボ人：野生動物を狩り、焼酎畑耕作のための土地を公園内に求めています。

バレガ人、バニヤンガ人：やはり狩猟を専業としていて、公園内に住み着く人々もいます。

これらの人々は貧困のために、森を破壊したり野生動物を狩ったりします。村々では失業者があふれ、子供たちも教育を受けることができない状況にあります。

この10年、ドイツ国政府による技術協力がザイル国の環境庁を援助してきました。病院が建てられ、井戸が掘られ、いくつかの村には小学校ができました。公園にもパトロール用の車や監視員の服、装備などが寄附されました。私たちはこれらの援助や技術提供に大変感謝しています。

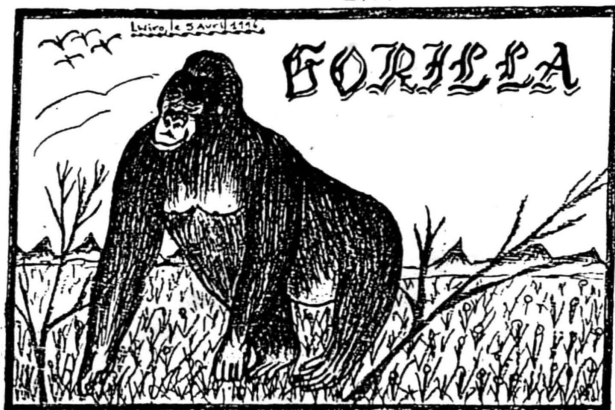
しかし、これらの援助は公園周辺に居住する人々の窮状を救うには十分ではありません。保護の促進には地元の人々の生活が豊かになることが不可欠です。このまま放置すれば、世界の自然遺産として認められているこの地域はまたたくうちに荒れ果ててしまうでしょう。そこで私たちは自身の手で故郷の自然を保護するとともに、その遺産を破壊せずに持続的に利用して地域の発展をめざすために、ポポフを創立したのです。

ポポフには、地元の経済発展をねらった3つの目標があります。

1. 公園周辺に住む5つの民族の伝統を生かした民芸品を若者の手で制作し、これらを観光客に販売し、海外に輸出します。
2. ゴリラ・ツアーにやってきた観光客が安く泊まれる宿泊施設やキャンプ場をつくり、さまざまな観光を企画するエージェントをはじめます。
3. 5つの民族間で独自の産品を交換する交易所を開設し、物資の流通を計るとともに資源の持続的利用を奨励します。

これらの活動で得た利益は、将来病院や学校を建てるなど地域の発展のために役立てようと考えています。ゆくゆくは、カフジ・ビエガ国立公園の自然遺産を教材として利用し、自然保護の理念と実践を学ぶ国際的な大学をこの地につくることを夢見ています。

すでに民芸品については、ポポフの事務所の隣にアトリエを設置し、ペンダント、彫刻、服などをさまざまなデザインして制作活動をはじめています。現在、隣国ルワンダの政治問題が解決していないために、観光客の足は途絶えています。着々とエコ・ツーリズムの企画は進められています。この夢ある企画に日本から多くの人の参加や支援が得られますよう、大いに期待しています。



ゴリラたちの近況

この1年は、カフジ・ビエガ国立公園に生息するゴリラたちにとって受難の年でした。隣国ルワンダの内戦によって、百万を超える人々が難民となり、公園の近くにも多くの難民キャンプができました。難民キャンプの人々は、国連や世界中のNGOの協力によって食料や衣服などの援助を受けています。でも電気がガスのないキャンプでは、煮炊きをしたり暖をとるために焚火をたかねばならず、人々は薪をとり公園内へよく入ります。公園以外の土地は地元の人々の所有で手が出せないし、すでに見渡す限りの農耕地になっているので樹木がまばらにしか生えていないからです。公園内に生息する動物たちはさまざまな樹木を食料や生活場所として利用しています。ゴリラもその例外ではありません。果実、花、葉、樹皮などが食物となり、樹上はベッドをしつらえて休息場として利用されることが多いのです。公園に入ってくる人々は、これらの貴重な樹木を伐採するだけでなく、あちこちにワナを仕掛けて動物を捕らえます。時にはライフルを携えてやってきて、ゾウを撃つことさえあるのです。

難民キャンプができてから、公園内に不法に仕掛けられるワナの数が増えました。毎日パトロールをしている監視員たちも銃声を聞きつけることが多くなりました。ゴリラたちは直接標の対象にはされていませんが、誤ってワナに手足を捕られることがあります。カフジ・ビエガ国立公園には、観光客の訪問を受け入れている4つのゴリラのグループがありますが、そのうちニンジャと呼ばれるグループで暮らしていたチャイという5歳のオスがワナで傷つきました。片手をはねワナで釣り上げられ、ワナからは逃れたものの、ワイヤーで手首が締め付けられて先に血が通わなくなり、とうとう手首から腐って落ちてしまったのです。今は元気で暮らしているようですが、チャイはこれからハンディキャップを背負って生きて行かねばなりません。

以下に、4つのグループの近況を記します。

ニンジャ・グループ 報告：ジョン・カヘークワ

このグループは、1975年にムシャムカ・グループで生まれたニンジャというオスゴリラが、1989年に5頭のメスと2カ月齢の赤ん坊を取り込んで出発しました。それ以来、ニンジャは次々に近隣の集団からメスを引き入れ、これらのメスが相次いで出産するため、集団は急速に大きくなりました。1992年以来、メスの数は15頭で安定していますが、ベビーブームで子供の数は増え、1995年にはメスの赤ん坊が生まれて総勢29頭の大集団になりました。集団の行動域も広くなり、以前マエシェ・グループが使っていた、北部の地域へと進出するようになりました。1995年にはムシャムカ・グループのラムチョップという若いシルバーバック（1981年生まれでニンジャの6歳下の弟）、さらに北部からやってきたグループのシルバーバックと出会い、胸を叩いて派手なディスプレイ合戦をしましたが、傷を負うような闘争にはあたりませんでした。

年	年齢クラス						計
	シルバーバック	ブラックバック	メス	子供		不明	
	バック	バック		幼児	赤ん坊		
1992	1	0	15	3	3	1	23
1993	1	0	15	3	5	1	25
1994	1	0	15	3	8	1	28
1995	1	0	15	3	9	1	29

ムシャムカ・グループ 報告：セルンドリ・エロイ

このグループは、カフジ・ビエガ国立公園がゴリラの人づけ（餌をやらずに野生動物と親しくなる方法）を開始した1971年頃に知られるようになりました。当時約20頭のグループで、すでに立派に成熟したオスのムシャムカがリーダーでした。それ以来ずっとムシャムカはこの集団のリーダーをつとめています。若く見積もって当時20歳としても、もう45歳になっているはずで、野生のゴリラとしては相当な年寄りです。近ごろでは歯が何本か抜け、体にもめっきり白い毛が増えてきましたが、目も耳も達者です。でもさすがに繁殖力はなくなったと見え、ここ2年ほど交尾をする姿を見かけていません。1993年にはオスの赤ん坊（ブワンバと命名）が生まれ、1994年には赤ん坊が生まれましたが1カ月半後に死亡（理由不明）、母親は死後2週間も赤ん坊の死体を抱いていました。1993年には2歳のオスの赤ん坊（ムゲニ）が翼にはまって死亡する事件がありました。成長した息子たちは次々にムシャムカのもとを離れて独立しています。1977年生まれのボワナは1992年に15歳で、1981年生まれのラムチョップとミントソースは1995年に14歳で離脱しました。その度に若オスたちはメスを連れ出していくので、メスの数は急速に減って現在ではわずか1頭になってしまいました。どうやら、カフジでは若いオスが親集団のメスを連れて独立するという、ヴィルンガのマウンテンゴリラには見られない現象がふつうに起こるようです。でも、子供たちはマウンテンゴリラと同じように母親の後を追わず、集団に残っていつも老ムシャムカの後をついて歩いています。

年	年齢クラス						計
	シルバーバック	ブラックバック	メス	子供		不明	
	バック	バック		幼児	赤ん坊		
1992	1	2	4	3	3	1	14
1993	3	0	3	2	2		10
1994	3	0	5	2	3		13
1995	1	0	1	2	3		7

マエシェ・グループ 報告：ロベール・ムリンビ

ザイルのお札にも印刷されて話題になったマエシェ・グループのリーダーオス、マエシェは1993年の11月から行方不明になっていましたが、マエシェと思われる白骨死体が公園内の湿地で見つかりました。マエシェと同年代のシルバーバックであることは間違いありませんが、一部の骨が紛失しており毛皮もなく、今となつてはマエシェかどうか確かめようがありません。マエシェが失踪して以来、グループのメスたちはしばらくまとまって暮らしていましたが、やがてばらばらと他のグループへ移っていきました。隣のムシャムカ・グループの若いオスたちが、何度となくマエシェ・グループのメスたちを誘いに訪れました。このうちボワナ、ミント・ソースという2頭のオスがそれぞれメスを誘い出して新しいグループをつくりました。ミント・ソースのグループはマエシェ・グループの行動域で暮らしています。ミント・ソースはまだ14歳でリーダーとなるには若すぎますが、何とか残ったメスたちと協力して、マエシェ・グループにもとの落ちついた生活をもたらしてほしいものです。

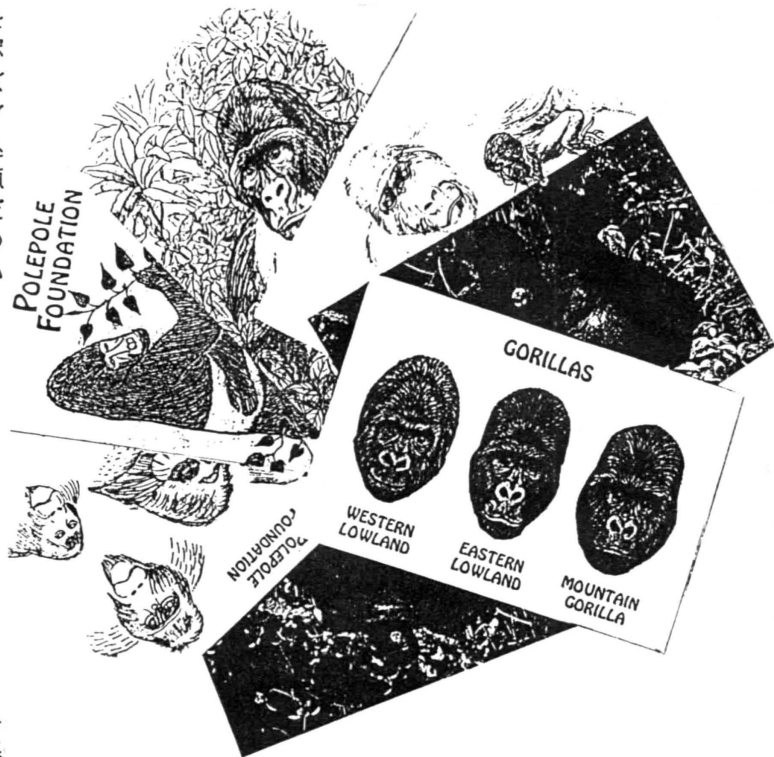
ムバララ・グループ 報告：ランベール・チリムワミ

ムバララは、1973年生まれのムシャムカの息子で、1986年に13歳で2頭のメス、3頭の幼児と一緒に新しい集団をつくりました。その後急速にメスの数を増やし、1992年までに10頭の集団になりました。ムバララ・グループの行動域は、ムシャムカやニンジャの他に多くのゴリラ集団が利用しており、しょっちゅう他の集団と衝突していますが、メスの出入りはほとんどなく、この4年ほど安定した構成を保っています。1995年久しぶりにメスが3頭加入し、赤ん坊も3頭生まれて一気に総勢16頭になりました。今後の発展ぶりが楽しみです。

年	年齢クラス						計
	シルバーバック	ブラックバック	メス	子供		不明	
	バック	バック		幼児	赤ん坊		
1992	1	0	7	0	2		10
1993	1	0	7	0	2		10
1994	1	0	7	0	2		10
1995	1	0	10	2	3		16

ポポフ・グッズの通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売上を現地の活動資金に寄付しています。今回はポポフを紹介するパンフレット、絵はがきセットの他、以下のグッズを現地から取り寄せ、通信販売することにいたします。これらのグッズはすべて手製です。ご協力していただける方は、同封の振り込み用紙にご希望の品名を書き込み、最寄りの郵便局で該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。ただし、品数には限りがありますので、品切れの際にはお手元に届くのが大幅に（2-3カ月）遅れることがあります。その旨、ご通知いたしますが、どうかご了承ください。



- | | |
|------------------------------------|-------|
| 「第3のゴリラとポレポレ基金」パンフレット | 600円 |
| ポポフ絵はがきセット（7枚組） | 600円 |
| 東ローランドゴリラ・ペンダント or キーホルダー | 2200円 |
| 東ローランドゴリラ・ワッペン（布製） | 1700円 |
| 東ローランドゴリラ・木彫り像
（灰皿になっているのもあります） | 8500円 |
| NEW 絵はがきセット（3枚組） | 380円 |

なお、振り込み用紙がお手元にない方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：0081-1-90217、加入者名：ポレポレ基金と記入した上で、必要事項を書き込んで下さい。

連絡先：〒484 犬山市塔野地大畔178-44
京大職員宿舎243
山極寿一方
ポポフ日本支部



ポポフ展と講演会のお知らせ

7月30日（火）- 8月4日（日） 堺町画廊
京都市中京区堺町御池下ル
Tel: 075-221-5370

ポポフの活動の紹介とポポフ・グッズの展示・販売
8月4日（日）にはバサボセ氏（ポポフの現地メンバー）
による講演も予定されています。

お願い：上記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けて下さる方があれば、ご連絡下さい。



デヴィッド・ビシムワ画
ポポフの活動風景